

## 死後の世界（パート1/2）:論拠

説明： 死後の世界を信じることに伴う要素

より [iiie.net](http://iiie.net) ([IslamReligion.com](http://IslamReligion.com)編集)

掲載日時 06 Dec 2009 - 編集日時 20 Feb 2017

カテゴリ： [記事](#) > [来世](#) > [死後の世界への旅立ち](#)

死後の世界があるかどうかという質問は、科学分野のものではありません。なぜなら、科学はただ記録されたデータの分類と分析に重きを置くだけだからです。更にここ数世紀、人は太古の昔から死後の世界の概念について馴染んでいたにも関わらず、現代の言葉でいう科学探求や研究

に追われているのです。神の預言者達は皆、神を崇拝し死後の世界を信じるために、彼らの民に呼びかけました。

彼らは死後の世界の信仰を非常に強調していたため、その真実性に少しでも疑いを抱くことは神を否定するどころか、他の全ての信仰をも無意味にしてしまうことを意味していました。神の預言者達はやって来ては去り、その到来の時期は何千年もの間に渡りました。そして彼らは皆、死後の世界について宣言しました。彼らが皆この形而上の問題を確信をもって、かつ一様に取り扱っているということは、死後起こることに関しての彼らの知識の源泉が全て同じところに発していることを証明しています。つまりそれは神の啓示なのです。



W私たちはまた、神のこれらの預言者達が彼らの民から厳しく迫害されたのは、主に一度死んだ者が復活することについて、彼らがそれを不可能であると思っていたからであったということを知っています。しかし彼らの迫害にも関わらず、預言者達は多くの信者を勝ち得ました。何がこれらの信者に、以前の信仰を捨てさせるような仕組みにしたのでしょうか？社会から完全に疎外されるリスクがあっても、何が彼らに先祖達の伝統と習慣、定着した信仰を拒否するまでに導いたのでしょうか？その単純な答えは、彼らが精神と心の能力を用いることにより、その真実に気づいたということです。彼らはそれを経験することによって、その真実に気づいたのでしょうか？いいえ、死後の世界を知覚的に経験することは不可能です。

事実、神は人間に知覚的意識、理性、感性、そして道徳的意識をも与えられたのです。この意識が人を感覚的データを通しては証明出来ない真実へと導いたのです。ですから神の預言者達は皆、人々に神と来世を信仰するよう呼びかけている間、人間の感性や道徳感、そして理性的側面に訴えかけたのでした。例えばマッカの偶像崇拜者達が死後の世界の可能性さえも否定した時、クルアーンは死後の世界を証明する大変進歩した、理論的かつ理性的な議論により、彼らの見解の弱さを露呈したのです：

“またかれは、われに準えるものを引合いに出して、自分の創造を忘れ、言う。「誰が、朽ち果てた骨を生き返らせましょうか。」言ってやるがいい。  
「最初に御創りになった方が、かれらを生き返らせる。かれは全ての被造物を知り尽くしておられる。緑の木から、あなた方のために火を造られたのもかれであり、だからこそあなた方はそれによって燃やす。」天と地を創造な

されたかれが、これに類するものを創り得ないであろうか。いや、かれは最高の創造者であり、全知であられる。”(クルアーン36:78-81)

また他の折には、クルアーンは不信者が死後の世界を拒否する根拠がないことを明言しています。それは単なる憶測に基づいたものです。

“彼らは言う。「私たちに有るものは、現世の生活だけです。私たちは生まれたり死んだりしますが、私たちを滅ぼすのは、時の流れだけです。」しかし彼らは、これに就いて何の知識もなく、只臆測しているだけである。われの明白な印が彼らに読誦されると、彼らの論法は只、「あなたの言葉が真実ならば、私たちの祖先を連れ戻しなさい」と言うだけなのである。’”(クルアーン45:24-25)

もちろん神は全ての死者を蘇らせますが、それは現世での私達のきまぐれや無駄な監査のためなどではありません。神にはかれ自身のご計画があるのです。全宇宙が破壊された時にその日はやって来て、そして神の前に立つために死者は再び復活するのです。その日が永遠の命の始まりとなり、全ての者はその善行と悪行によって神からの報いを受けます。

クルアーンが示す死後の世界の必要性についての説明は、人の道徳的意識が必要とすることです。事実もし死後の世界がなければ、神への信仰は無意味となるか、あるいは例え或る者が神を信じたとしても、それは理にそぐわない適当な神となるでしょう。またそのような神は、かつて人間を創ったものの、その後の彼らの運命には無関心なだけの神となったでしょう。もちろん神は公正です。かれは何百もの罪のない人を殺し、社会に大きな不正を生み、気まぐれにまかせて多くの人を奴隷にするなどの数えきれない罪を犯した暴君を罰されます。人はこの世界で非常に短い期間生活をするのであり、またこの物理的な世界は永遠ではなく、人の高貴な行いや邪悪に対するそれ相応の罰や報いはこの世界では達成されません。クルアーンには審判の日が必ずやって来て、そして神は各々の魂がその行為の記録に応じてその運命を決定される、と述べられています：

“信仰のない者は、「(審判の)時は、私たちには来ないであろう。」と言う。言ってみよう。「いや、主に誓って、それは必ずあなた方にやって来るのである。幽玄界までも知っておられる主に誓って。天においても地においても、微塵の重さでも、かれから免れられるものはない。またそれより小さいものも大きいものも、明確な書に記されないものはない。それはかれが信仰して善行をする者に、報われるためである。これらの者にこそ寛容と寛大な御恵みがあろう。だがわれの印を虚しくするために努力する者、これらの者には痛ましい懲罰があろう。」(クルアーン 34:3-5)

復活の日、神の特質である正義と慈悲で満ち示される日になるでしょう。神は、永遠の祝福が待っていることを信じつつ、かれのために現世で苦労した者にその慈悲を浴びせられます。しかし神の寛大さを乱用し、来世を気にかけない者は、最も惨めな者となるでしょう。クルアーンの中には、彼らの明瞭な対比が述べられています：

“われが良い約束を約し、それが果される者と、現世の生活の快楽を享受し、それから復活の日に(懲罰のために)連れ出されるような者とは、一体同じであろうか？”(クルアーン 28:61)

この記事のウェブアドレス :

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/275>

Copyright © 2006-2015 [www.IslamReligion.com](http://www.IslamReligion.com). All rights reserved.